



ミクロネシア諸島自然体験交流事業（受入）

実施期間：令和8年6月18日（木）～22日（月）



目的・趣旨

日本とミクロネシア諸島の国々の青少年の国際交流を通して、グローバル社会に対応した高い国際感覚を備えた青少年を育成するとともに、地球温暖化をはじめとする環境問題などの国境を越えた地球的規模の問題の解決に向けて自分たちにできることは何かを考える契機とする。

事業概要

- 【参加者数】 ミクロネシア連邦（ポンペイ州）：子供12名（10～14歳）、シャペロン（引率）2名
マーシャル諸島共和国：子供24名（10～14歳）、シャペロン（引率）4名
ホストファミリー：18家族（日本人の子供29名）
- 【実施内容】 ・地域探訪【岩の原葡萄園】（葡萄園散策、雪室体験）
・妙高市立妙高高原小学校との交流会（日本の遊び、文化紹介、給食体験）
・ホストファミリーの子供たちとの宿泊体験（森探険・葉っぱスタンプ・焚火体験）
・ホームステイ
・フェアウェル（お別れ）パーティ

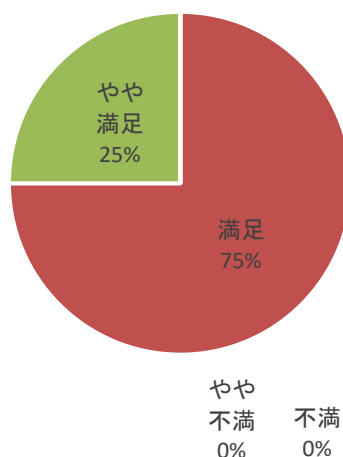
事業のポイント

- 日本最古級の葡萄園と豪雪地帯特有の雪を利用した天然の冷蔵庫（雪室）を体験することで、上越地域を学べるよう、特色ある地域プログラムを企画した。
- 地域の小学校との交流では、日本文化（書道・折り紙・竹馬・けん玉・給食など）に親しみ、ミクロネシア諸島の歌や踊りを鑑賞し、お互いの文化に対する興味・関心を深めることができた。
- 宿泊体験やホームステイでは、お互いの文化や風習を尊重しあい学び合えるよう、事前学習会やオリエンテーションの内容を工夫した。

成果

- 参加者の事業全体を通した満足度は、「満足」「やや満足」を合わせて100%となった。
- 「家族の絆が深まった」「ミクロネシアのことを調べることで家族間の会話が盛り上がった」など、家族全員で交流事業に参加した様子がうかがえた。
- 英語学習の必要性を感じた一方で、「言語以外の部分での異文化交流の難しさや楽しさを感じた」など、海外や異文化理解に対する関心が高まったという感想が得られた。
- 戦争や経済、環境など各国の状況に興味をもったという感想があり、地球環境や平和のために自分たちができることを考えるきっかけになった。
- 小学校との交流体験では、給食後の昼休みに、双方の子供たちが率先して関わろうとする姿が見られた。短い時間ではあったが、互いに別れを惜しむ姿が見られ、今後の成長につながる貴重な体験となった。

参加者満足度



事業の様子



岩の原葡萄園



歓迎セレモニー



妙高高原小学校



フェアウェルパーティー



ホストファミリー



葉っぱスタンプ

参加者の声

- 「家族の絆が深まった。子供が海外や異文化を身近に感じ、世界に目を向けるきっかけになった。」
- 「子供たちがとても楽しそうにしていたり、別れを悲しんだり、予想以上に体験と感動を得ていて、大変嬉しくなった。」
- 「ミクロネシア諸島にとっても興味をもった。参加前は不安をもっていた子供たちも、一緒に過ごす中で打ち解けた様子で安心した。子供なりにコミュニケーションを取ったり手紙を書いたりして、我が子の成長も感じる事ができた。」
- 「言葉が十分に伝わらなくても、お互いに理解する意思があれば心を通わせられると実感した。ミクロネシアの子供たちから戦争に関する話題が出たことで、自分たちの歴史や平和への関心を改めて考え直す良い勉強になった。」

課題

- 事前学習会で、ホストファミリーには「受入の心構え」などを説明したが、ミクロネシアの子供たちに対しホームステイ時の「ハウスルール（コミュニケーション・携帯・お風呂・トイレ）」についてもっと説明が必要である。特に、ホームステイ中の携帯は最小限にするということを、ホームステイ出発前に、ホストファミリーとミクロネシアの子供たちと共に、確認・共有できたら良い。
- 日本文化体験の一環である大浴場での入浴は、ミクロネシア諸島の子供たちにとって、心理的ハードルが高い。キャンプ場のシャワールームを開放するなど、配慮した対策を検討したい。